



七 仲間 I

「一体、なんで、こんなことをする必要があるの？」

巫女姿の同僚が怒りに任せて、ヘッドフォンを床に投げつけた。床に叩きつけられたヘッドフォンは理由がわからないまま空中に一度飛び上がった後、どこへゆく当てもなく、床を転がっていった。そのヘッドフォンを誰かが拾った。

支配人だ。今日も相変わらず、白い上下のスーツに白いシャツ、白い革靴を身に着けている。顔や手の皮膚も白い。全身白無垢だ。美里が知る限りでは、支配人が白いスーツ以外の服を身に着けているのを見たことはない。赤や緑、青など全ての色の光を一点に集めると白くなると聞いたことがある。確かに、光は白だ。この組織を束ねる支配人にとって、白はその象徴なのか。

「あなたたちを守るためですよ」

支配人は拾ったヘッドフォンを巫女姿のハートケア士にゆっくりと差し出す。

「心が十分に浄化できていないようですね。後、三十分も装着していれば、感情の高ぶりも落ち着きますよ」

相変わらず、無表情で、無感動な支配人。淡々と説明するだけだ。

「嫌です。何で、こんな変なものを被らないといけないんですか。被らなくてもあたしは平気です」。

ガシャ。巫女は支配人が差し出したヘッドフォンを手で払い落した。そして、踵を返すと、部屋から出ていこうとした。支配人が顎を上げた。同じく白いスーツ姿の受付ロボット二体が巫女を両側から挟む。

「何をするの」

巫女はその手を振り払おうとするものの、両腕を掴まれているので、身動きができない。ロボットは、人間の力の何倍、何十倍もの力がある。美里たちハートケア士数十人が一斉にロボット一体に対して飛び掛かってもかなう相手ではない。そのロボット二体が両側から掴んでいるのだから、美里だったら逃げることも、動くこともできない。

「ヘッドフォンを着けることは嫌がっているようですので、椅子に座らせてください」

支配人の指示に従い、ロボットたちは巫女をマッサージ機のような椅子に座らせる。

「何をするの。これはパワハラよ。セクハラよ。訴えてやる」

巫女は髪を振り乱して暴れる。とても神社でお守りを授けたりしている、おしとやかな巫女のように思えない。もちろん、彼女は本物の巫女ではない。巫女のコスプレを身に着けているだけで、内面はどのようなものかはわからない。

ただし、支配人からは、例えば、巫女やアルプスの少女ハイジなどの、コスチュームを身に着けていれば、その服装だけでなく、心も同様に、巫女やアルプスの少女ハイジに変身するように厳命されている。そうした規則から言えば、彼女は違反している。

巫女の服がちりじり、ばらばらに破れていく。彼女の暴れ方は半端ではない。ロボット二体を振りほどこうとしている。普通の地球人では考えられない。その時、何かが飛び出た。長い触手だ、それが何本も伸びている。タコだ。いや、タコに似た星人だ。

彼女はタコ星人だったのか。他の惑星の人たちは地球を訪れると地球人のコスチュームを身に着ける。そして、私たちハートケア士と精神の交信をするときだけ、そのコスチュームを脱ぐのだ。美里は地球人だが、お客さんが他の惑星の人であるように、美里たちハートケア士が地球以外の惑星の人であっても何ら不思議ではない。

タコ星人の体から八本の手足がでて、二体のロボットの体に纏わり着いた。ロボットたちの動きが止まる。美里は支配人の顔を見る。白い肌には赤身は差していない。何の驚きも示さない証拠だ。

ひょっとして、支配人も地球人の皮を被っているだけなのかもしれない。その白い皮膚の下には黒きおぞましきものが隠されているのか。多分、そうだろう。そうでなければ、美里たちハートケア士の支配人にはなれないのではないか。

支配人が再び、顔を上げた。動きが膠着していたロボットが再び、活発に動き出した。リモコンで、空調機の温度を上下したり、風の強弱を変更できるように、支配人は顔を上下することで、ロボットのパワーの強弱を変えることができるようだ。

ロボットたちは、もはや巫女ではなく、タコの姿に戻った星人を椅子に抑えつけ、体をベルトに装着させると、上からカバーを下した。あれほど、激しく暴れていたタコ星人だったが急に静か

になった。そして、十分もたたないうちに、憑き物が落ちたかのように穏やかな顔つきになった。ロボットたちが支配人の顔を見た。支配人が頷く。ロボットたちはタコ星人をカプセルから解放した。

「あれ、あたし、どうしたんですか。嫌だ。元の姿に戻っているじゃない」

タコ星人は、恥ずかしそうに八本の触手でくねらせながら体を隠した。支配人は彼女に近づくと、新しい人間のコスチュームを手渡した。

「さあ、これに着替えなさい。それと、今日は家に帰っていいから」

「すみません。ありがとうございます」

タコ星人は触手を伸ばし、支配人から人間のコスチュームを受け取ると、素早く着替えた。さっきまで、映画「テナクルズ」のように暴れていたことをまるで覚えていなかったかのように大人しい。

フロアーには、美里のほかに、他のハートケア士のメンバーが数人いたが、互いに目を合わせることなく、いつものようにお決まりの場所に座った、この鏡張りのフロアーは、初めて面接した時は、落ち着かず、不安で一杯だったが、今は、自分はもちろんのこと、他の人も鏡に映っているのを見るとかえって安心する。支配人はこれを期待していたのだろうか。だが、そんなことを支配人に尋ねても、何も答えないだろう。

あの喧騒と激しい乱闘が治まった後、美里は指定のソファに座った。ソファは部屋の中央にあるため、他の人は座りたがらないのだ。だから、いつも席は空いている。元々、鏡張りの部屋だから、周りから見られることには慣れている。だから、美里は正々堂々とソファに座るのだった。

そして、バッグから紙の本を取り出し、読み掛けの小説を読もうとした。スマホでも小説は読めるのだが、紙の本の方が、持った時の重みとページをめくる感触で、読書をしているという実感につながる。そのため、読書する時は紙の本と決めている。それに、紙の本ならば、何かの用事が入った時でも、しおりを挟めば、すぐにしまうことも出来るし、次回からもすぐに読むことができる。

「M3333番さん、予約が入りました。カウンターにお越しく下さい」とアナウンスが部屋に響き渡る。

M3333番。これは美里の番号だ。ここでは名前を呼ばない。全て番号だ。だからこそ、さっきの巫女のタコ星人、いや、タコ星人の巫女がいるなんて、お互いわからないのだ。それに、お客さんにはハートケア士の名前なんて必要がない。お客さんが欲しいのは、自分の要望に合わせたコスチュームを着て、自分の負の気持ちを吸収してく、ストレスを軽減し、穏やかな気持ちにしてくれるハートケア士だ。だから、お客さんは、例えば、巫女さん、などとコスチュームで名前を呼ぶだけだ。

美里は読み始めた小説を閉じて、しおりを挟む。読み始めて数行しか進んでいない。だが、それで満足だ。美里にとって、読書は、所詮、指名を受けるまでの時間つぶしに過ぎない。この小説も細切れに読んでいるために、ストーリーが全然頭に入らない。逆に言えば、いつも新たな小説を読んでいるようだ。

でも、美里にとっては、お客さんとの心の交流の方が小説よりも新鮮に、奇に感じる。いや、奇過ぎて、先ほどの巫女のタコ星人のように、精神の変調を来たしてしまいそうになる。ある意味、小説を読むのも、こうした奇なる事実を奇に感じないようにするための予防接種なのかもしれない。

美里は受付のカウンターに進む。そこには、先ほどまで、タコ星人と格闘していた受付ロボットが立っていた。彼女？たちは、一見、地球人に見える。そういう意味では、このロボットたちも、地球人の皮を被っているのかもしれない。その皮を被っているだけのせいか、先ほどの激しい格闘からまだそんなに時間が経過していないのに、息を切らすことなく、平然とした振る舞いをしている。

「クレッセンドホテルの3501号室です。ロビーでの待ち合わせはありません。部屋に直接伺ってください。なお、お客様はシンデレラの服装を要望しています。ただちに出発してください」

カウンターには大きなバッグが置いている。バッグの中にはシンデレラのコスチュームが入っているのだろう。

いつも思うことだが、相手がどんな人、どんな惑星の人かもわからずに、ホテルの部屋に行くことにためらいはある。それ以上に、相手がどんな経験を、どんな感情を交信してくるのかもわからない。不安だらけだ。そんなところに、いくらお金のためとは言え、仕事だからとは言え、よく乗り込んで行くものだと、自分ながらに感心する。

ほんと、美里はすごいわね。

まだ続けているの。

どんな感じ？

心が疲れるよりは、体が疲れる方がまだましよね。

素敵な人に出会ったことはあるの？

学生時代の友人たちと女子会を開催している時、それぞれが近況報告をした際に、美里も今の仕事の一部だけを報告する。その度ごとに、友人だけに、遠慮のない、ストレートな、そして、同じような質問を発する。

すごくないわ。みんなにもできるわよ。

まあ、なんとなく続いているわ。

毎回、感じ方は違うわ。

だから、ヘッドフォンで心の膿を、心の傷を吸収してもらっているの。

仕事だから。感情は受け入れているけれど、相手への関心はないの。

と、その度ごとに、同じような答えをする。

確かに、他の友人たちの仕事と比べると、美里の仕事は変わっているかもしれない。だけど、どんな仕事だって、他人にはわからない秘密はある。他人には言えない経験はある。ただし、美里の仕事は、友人たちの仕事と一見して違うことから、特別な関心を持たれているだけだ。

だが、美里の仕事への関心も女子会では単なる話題の一つでしかない。通り過ぎていく旅人が残したようなつぶやきなのかもしれない。それが証拠に、友人たちで、美里の仕事をやってみたいと言ってきた人は誰もいない。また、美里も友人にこの仕事を紹介したいとも思っていない。

学生時代の、勉強やスポーツ、旅行、授業終了後のダベリ、コンビニでの待ち合わせ、フルーツパーラーで甘味を食べて過ごした時間とは、全く違う。安全な中での、ひと時の消費と、今のこの仕事の客との感情の共有は全く異なる。この経験をすればするほど、自分一人だけがどこか遠くの誰も知らない場所へ行き、友人たちとは疎遠になっていく気がする。それが一番怖い。

美里にとって友人たちは、暗い海の中に漂う、救出ボートのようなものかもしれない。泳ぎ疲れ、精神的にも、肉体的にも疲れ果てて、もうだめだ、と思った時に、すぎる、寄り添う、ひと時の休憩場所なのだ。それでも、やがてそこからは離れて、暗闇の中に泳ぎだす。だけど、それは一人でいい。友人たちと一緒に泳げない。友人たちと共に泳ぎだせば、唯一の安息場所のこのボートさえもなくなってしまうのではないか。

「はい。わかりました」

美里はバッグを肩に掛けると事務所のドアを開く。部屋の鏡に映る美里の横顔、頭髪、背中、足下などの分身がやさしく美里を見送ってくれた。

事務所のビルの玄関には送迎用の車が既に配置されていた。運転席のドアのすぐ側にロボットが立っていた。美里が車に近づくと後部座席のドアが自動で開く。美里は先にバッグを入れると体を座席に滑らせた。と、同時に、ロボットも運転席に座った。

「クレッセンドホテルへ」

「お伺いしています」

その言葉とともに、車は上昇し、目的地に向かって飛行し始めた。

運転は自動で行うので、運転手の必要ない。ただし、美里たちハートケア士が派遣される際は、ロボットのボディガードが必ず随行することになっている。ボディガードは美里たちの仕事が終わるまで、ホテルの近くを車で飛行したり、ホテルの駐車場やロビーなどで待っている。美里たちに何かがあった時にすぐに対応するためだ。

その何かとは、一つは、ハートケア士がお客さんからの暴行などを受けた場合、部屋まで行って助けるため、もう一つは、ハートケア士がお客さんたちからの感情流入に対応できずに、ホテルの部屋や廊下などで倒れてしまった場合に、車まで運ぶためだ。

幸運なことに、これまで、美里はボディガードにお世話になったことはない。お客さんがたまたまよかったのか、それとも、美里の精神が気丈なだけだったのか。

「ふう」

美里は大きくため息をつくとき、目をつぶった。風の音がガラス窓越しに聞こえる。車がスピードを上げているのだ。すぐに着くだろう。心を落ち着けさせる。今から、また、新たな経験が、体

験が始まる。目を開けると、かなり遠くの方に、クレッセントホテルの雲まで届きそうな高層なビルが聳えている。後方には、何の変哲もない美里たちの事務所があるビルが控えていた。